

『ドイツ人論』における エリアスの社会学者としての立場－ 非文明化の過程とナチズムの出現

大 平 章

Norbert Elias's Stance as Sociologist in *The Germans*

Akira OHIRA

Abstract

This essay aims to clarify the significance of Norbert Elias's last book to be published before he died and entitled *The Germans* by pointing out the important relations between the concepts of civilizing processes [Zivilisationsprozesse] and decivilizing processes [Entzivilisierungsprozesse] in his sociological theory. The two concepts are actually so closely and mutually related that we cannot fully understand why civilizing tendencies in human society will change into decivilizing ones without understanding their interdependent characteristics. According to Elias, civilizing processes basically need a long term of pacification by means of the state monopoly of physical violence and taxation while a relatively short term of violence likely to be triggered by revolution, civil war, economic depression, or even the deterioration of inter-state relations tends to give rise to decivilizing processes. For example, the uncertainty and instability of the human mind under external pressures will generate a high degree of aggressive and destructive behaviour and conduct, since external constraints [Fremdzwänge] gain the upper hand over self-constraints [Selbstzwänge] or self-control. On the basis of this theory, Elias successfully demonstrated how Germany and the Germans fell into a trap of violence and destruction through long historical processes, contributing to the emergence of the National Socialist Party and Hitler. Another important aim in this essay is to shed more light to the concept of informalization [Informalisierung] which can often be found in modern society as a cultural phenomenon, where the life style and values

monopolized by an elite class are to be transmitted to a non-elite class by the extension of chains of interdependency, namely by functional democratization. In the case of Germany, the duelling society (satisfaktionsfähige Gesellschaft) symbolizing the predominance of German aristocratic strata was handed down to the middle and even working classes there in due course, thus creating the ethos (Habitus) of the warriors leading to Nazism. The final, vital question in this essay is whether one can apply this sociological model of Elias's to the case of another nation state that has taken a similar historical course in modern times, like Japan.

(1) 『ドイツ人論』の出版について

1990年にアムステルダムで93歳の長寿を全うしてこの世を去ったノルベルト・エリアスは、その前年に実質上、最後の名著となる『ドイツ人論』(*Studien über die Deutschen, The Germans*)を上梓したが、この本もエリアスの著書の多くがそうであるように、出版にいたるまで多少複雑な経路をたどっている。晩年、聴覚や視覚をほとんど失っていたエリアスは、口述筆記に頼らざるをえず、独力で著書を出版することはかなり難しい作業であった。そういう事情もあり、本書の出版には編集者ミヒャエル・シュレーターの尽力が必要であった。シュレーターは、本書を構成する論文や記事の選択や編集に当たってエリアスの承認と同意を得た上で、最終的に自分の責任で出版作業を終えた。19世紀から20世紀にかけて起こったドイツ社会の大きな変化を分析したこれらの論文の多くは、彼がイギリスに亡命し、当地の大学で教えていた時期から一時的にドイツに戻った時期にかけて書かれたものであり、それを1冊の書物としてテーマに一貫性をもたせるには、この編集作業は重要であった。そうした編集上の配慮により、本書の各部・章ではいずれもエリアス自身の重要なメッセージが社会学的に方向づけられているが、それを年代順に読むか、あるいはテーマ別に読むかは読者の選択に委ねられている。こうした事情によって内容的に多少重複する部分があるとはいえ、どちらの方法で読み進めても本書には、母国の激動波乱の歴史的变化を冷静に見据えるエリアスの社会学者としての洞察力が窺えることは確かである。

本書の英訳が出たのは、原典が出版されて7年後の1996年のことであり、英語圏の読者にその内容が理解されるまでかなり時間がかかったことになる。そ

うした事情もあり、エリアスの社会学理論を研究する上で不可欠となる『ドイツ人論』は、研究資料や参考文献としてまだ十分に活用されているとは言えない。¹英訳のもう1つの問題——それは、英語版『文明化の過程』(*The Civilizing Process*)の表題にも当てはまるが——は、原典の表題に使われているドイツ語の前置詞(über)が省略されていることである。それを省略すると、本書がまるで異文化研究的なある種の文化論でもあるかのような印象を読者に与え、ドイツ人の性格や国民性が、静的で不変であると解釈される危険性がある。そういう意味では、本書の「19世紀および20世紀における権力闘争とハビタスの発展」という副題の方がエリアスの言う長期的な社会学的視野や枠組みをより具体的に説明しているように思われる。²なぜなら、エリアスはドイツ人の人格構造を、静的で不変のものとしてではなく、19世紀から20世紀にかけて、あるいはそれ以前から継続的に起こったドイツの歴史的、社会的変化と相互関連的に捉えているし、またそれを将来も、周辺諸国との関係やドイツ自体の国際的な役割によって変わらう発展的なものと見なしているからである。実際、本書はベルリンの壁の崩壊によってドイツが国家として再統一され、国際共産主義運動に大きな変化が生じる前年に出版されたため、その論文のいくつかは冷戦構造の継続を前提にしながら書かれてはいるが、その基本的な態度は未来志向的である。したがって、ここで分析の対象とされる国家社会主義の台頭とそのイデオロギーの性格、およびホロコーストに代表されるナチスによる文明の破壊は、あくまでもそうした長期にわたるドイツの国家形成過程、それに連動するドイツ国民のハビタス形成過程の所産として理解されるべきであり、そこにエリアス独自の社会学的診断がある。

周知のごとく、ナチスの破壊的な暴力とアウシュヴィッツ強制収容所におけるユダヤ人への非人間的な行為は、名誉あるドイツ市民の名を永遠に傷つけることになり、しばらくの間、「生来、残酷な民族であるドイツ人」というありがたくない、忌まわしい印象を他の国民の心に深く刻みつけることになった。ヒトラーの常識を越えた異常な性格、ナチ親衛隊やゲシュタポの冷酷無比な軍事活動についてこれまで数多くの本が書かれてきたし、これからも書かれ続けるであろう。たとえば、アンネ・フランク財団が発行した『アンネ・フランクの世界』にはナチスの残虐性を証明する写真がいくつか含まれており、その中の1枚に累々たる

死体が埋まった穴の前でナチスの将校によって頭に銃口を向けられている若いユダヤ人男性の姿が映っている。³まさに背筋が凍りそうな光景である。どうしてあのような残虐行為をナチスは——それはナチスだけではないが——行ったのだろうか。その質問に対して多くのドイツ人は、あのような非人間的な行為が自分の周辺でなされていたことなど知らなかった、国家社会主義のユダヤ人政策について国民には何も知らされていなかったと答えるかもしれない。そのような答えは、エリアスの言う「人間集団の相互依存の連鎖」という社会学的観点からすれば、個人としての言い訳として成立しても、とりわけ他の国民や民族に対する説得力を失いかねないかもしれない。つまり、国民対国民の関係において、現代にいたるまでわれわれは「われわれ集団」と「彼ら集団」という状況に立たされているのである。⁴したがって、エリアスがたびたび指摘しているように、「われわれ意識のないわたし」(we-less I) という個人中心の存在意識は、哲学の世界では有効であっても、人間集団の社会行動を分析する社会学の概念としては、少なくとも「現実適合的」ではない。テクノロジーや情報手段が飛躍的に発展した現代社会でも——あるいは逆にそれだからこそ——国民としてこの「集団意識」は「個人意識」よりも強い場合がある。だからこそ小さな領土をめぐって、あるいは小さな島の領有権をめぐって諸国民がそれぞれ「われわれ集団」と「彼ら集団」に別れて対立することもありうるのである。その人が個人的にいくら良い人間でも、他の国民はその人を「良い国民」とは見なさないかもしれない。

かくして、個人としては知的で教養があり、善良なドイツ人もナチスの残虐性の責任を国民全体で負わされることもありうる。こうしたある種の連帯責任の名残は、人間が昔から農耕・狩猟生活で「われわれ集団」や「彼ら集団」という意識に基づいて行動してきたことに由来するのかもしれない。そうした集団生活とそこから発生する集団意識が少なくとも今でも「国民的性格」と大雑把に呼ばれるものと関連しているように思われる。ファシズムという点ではドイツのみならず、イタリアもまた第2次世界大戦中に同じ路線を歩んだが、その特殊な政治形態や指導者としてのムッソリーニのイメージは、ナチスの政策や独裁者としてのヒトラーのイメージがドイツ人の心に深い傷を残したのに比べれば、イタリア国民全体に癒しがたい外傷体験を負わせたようには思われない。イタリア国民の人

格構造はむしろ地中海特有の楽天的で享乐的な性格に代表され、イタリアのファシズムも一過性的な政治現象と見なされがちである。

これに反して、ドイツ国民の人格構造は、自己中心的かつ排他的で、部外者をガス室や強制収容所に送り込む危険な暴君的気質と同一視され、ドイツのファシズムはドイツ人だけが有する永遠の、変わることのない民族的性格の反映と見なされがちである。一方は時間の経過とともに忘れ去られる可能性があっても、他方はその罪を永遠に記憶されてしまう。というわけで、元ナチスの将校であったり、その政策に加担したりした政治家や作家は、その事実が明るみに出れば、これまで自らが築いた名声や地位を失わなければならないのである。なぜドイツ人がこのような国家社会主義に代表される軍事中心の政治形態とその体现者である強力で、超人的な指導者を求め、その体制が犯した罪を贖わなければならないのかという問いに対して社会学的な診断を下すのがエリアスの本書における重要な作業である。

こうした状況の背後には、経済・政治次元での単一の因果関係ではなく、長期に及ぶ歴史的過程があり、さまざまな要因が相互依存的に絡み合い、重なり合い、複雑なネットワークが形成されているのである。エリアスによれば、長い宗教戦争で国家統一が遅れたドイツの場合、それは18世紀頃から徐々に形成され、第1次世界大戦の敗北とワイマール共和国成立の時代に拡大し、第2次世界大戦前の国家社会主義の台頭とヒトラーの登場によってさらにその力を増大させた。それに関連する国民的エトスは、ファシズムへの反動として、またその罪の意識から戦後もまた、とりわけ1960年代後期から70年代にかけて起こった学生の大規模運動の中に命脈を保った、とエリアスを見る。つまり、国家社会主義運動そのものや独裁者としてのヒトラーの出現は、特に異常な現象ではなく、むしろ構造的に絶対主義的体制と専制的国王制度に近いものがあるが、それをドイツ的な形——たとえば、ユダヤ人の大量虐殺や強制収容所やガス室の建設など——にしたのは、ドイツ国民がたどったこの特殊な歴史的過程にあることをエリアスは示唆しているのである。

この問題は『文明化の過程』とも関連する。なぜなら、エリアスはその冒頭ですでにドイツにおける「文明化」(Zivilisation)と「文化」(Kultur)の違いに言

及しているからである。ここで、注意しなければならないのは、ドイツは、『文明化の過程』で分析される西ヨーロッパの文明圏にとって、英仏と並んで重要な役割を果たした国として位置づけられていることである。そこではまだドイツがナチズムの暴力に支配されているという事実——実際この本が出版された1939年にはすでにナチスが権力を奪い、ナチ親衛隊が跳梁していたが——には触れていない。しかし、エリアスはそこで英仏、特にフランスと比べて、ドイツではフランス的な「文明化」を支持する貴族と、「文化」を支持する市民階級が分裂し、双方が国家像をめぐる対立してきたことに注目している。ここでは洗練されたマナーやエチケット、服装や言葉遣いなどに代表される貴族の文明化された生活様式を、「虚飾」と見なし、学問や文化を通じて教養を高めることに価値を見出す市民階級が注目されなければならない。上流貴族が官僚や軍隊の要職を占め、社交界を活動拠点にするのに対して、それにあまり縁のない市民階級の活動の中心は主に大学であった。ドイツの国家的統合の夢はナショナリズムという形でむしろこうした市民階級の活動から生まれることになるが、歴史が証明するように、国家統一の夢はたびたび打ち砕かれ、ワイマール共和国成立後の混乱期を経て、市民階級の多くは、武力による偉業で国家統一を実現してくれる強力な指導者に幻想を抱くようになった。端的に言えば、このようなドイツ独特の歴史的な過程で、文明化が推進され、皮肉なことに、逆にナチズムの暴力に代表される非文明化的現象が生じたのである。

というわけで、長い平和な時代は、人間社会を文明化の方向に向かわせるが、一度、文明化の「鎧」——人間を外から拘束する力（国家による暴力独占）と人間を内から拘束する力（自己抑制）——が崩れると、人間社会は止めどもない暴力の連鎖に陥りがちである、という認識をエリアスがその段階でもっていたことを知る必要がある。文明化の条件とは、人間がどれだけ社会的、心理的次元で、あるいは自然を理解する際に自己抑制できるか、合理的判断能力をもてるかなのであるが、人間社会では、その3組の統御能力が同時に進歩するとは限らない。⁵なぜなら、人間の生物的進化は人間の社会的発展とは違うからである。つまり人間は生物として猿やアメーバに戻ることはできないが、暴力の少ない時代から暴力が溢れる時代に逆行することはある。20世紀の数々の大規模な戦争でど

れだけ多くの人間が死んだかわれわれは知っているし、宗教対立や国家の内紛による民族浄化やテロリズムで21世紀の現在でも多くの人命が暴力によって奪われている。まさしく人間集団はヤヌスの顔のごとく、求心的な力で和平化（文明化）に向かう場合と、遠心的な力で暴力化（非文明化）に向かう場合がある。こうした人間集団の二面性は、必然的な自然法則によるものではない。エリアスが分析するように、それは相互依存する人間集団の力学の具体的な表れなのである。絶対的に平和な時代も、絶対的に暴力的な時代もあるわけではなく、問題はその相互依存関係の度合いがどちらに傾くかである。和平化には長い時間が必要であり、文明の破壊は短期間に起こるかもしれない。どちらにせよその動向を理解するには長期的な展望や視野が必要であるし、エリアスは『ドイツ人論』でもそれを堅持している。

エリアスが『ドイツ人論』において関心を抱いたのは、どのような歴史的背景で、またどのような歴史的過程と人間のネットワークを通じてドイツ人は長い暴力の連鎖に陥り、文明化の方向から遠ざかったかを分析し、自分なりの答えを見つけることであった。そこで彼は、生まれつきドイツ人が暴力的であり、ヒトラーのような独裁者を求める傾向を有していると言わんとしているのではない。条件が同じであれば、他の国民も同じ状況に陥ることはありうるので、ドイツ人はここでは社会学的な事例研究の一対象であるとも言えよう。もちろん自分自身ナチスに追われてイギリスに亡命し、母親をアウシュヴィッツで殺されたエリアスにとって、冷静な態度で、つまり彼の言う「距離化された」視点で対象を捉えることは楽ではない。ドイツ人としてまた同時にユダヤ人として祖国ドイツの過去を公平に判断することも難しかろう。が、「参加」しながら同時に「距離」を置くことで彼が現実に適した態度を本書で見せていることは事実である。⁶こうしたことを念頭に置けば、長い時間を費やして出版された『ドイツ人論』が、『文明化の過程』で提示された問題、つまり、文明化はどこまで続くのか、どのような過程で破壊されうるのかという問題に答えを与えるのにふさわしい書物であることが理解できよう。

（２）「非文明化」と「非形式化」の過程

エリアスが『文明化の過程』で方向づけた社会学の概念が文明化の過程の理論であるとすれば、『ドイツ人論』でのそれは非文明化の過程の理論である。両者は相補的である。一方を理解するには他方も理解する必要がある。Ｓ・メネルは比較的早くその問題を取り上げ、次のように論じている。

別言すれば、文明化された行動を構築するには長い時間がかかるが、それは、高いレベルの内的和平化に依存し続けており、むしろ急速に破壊されることもありうる。文明化の過程と非文明化の過程の間にはある種の対称的關係がある。前者は比較的長期的な過程になりうるだけであり、一方、後者は比較的急速に優勢になりうる。われわれは、相反する圧力間の緊張バランスという表現で考える必要がある。非文明化の傾向、非文明化の圧力はいつも存在している、と論じられよう。実際、文明化の過程は（盲目的で無計画な過程として）人々が自分たちの生活の中で非文明化の圧力——たとえば、暴力や不確実性の脅威——によって突きつけられる問題を解決しようとする努力から生じる。だから、われわれは、文明化の過程と非文明化の過程をお互いに排斥し合うものと見なす必要がある。問題は、短期間であれ、長期間であれどちらの力が支配的になるかということである。⁷

メネルはまた非文明化の過程という概念を具体的に説明するために、さらに次のように述べている。

エリアスは、文明化の過程を外的束縛（他者による束縛 [Fremdzwänge]）と内的束縛（自己による束縛 [Selbstzwänge]）とのバランスにおける変化を伴うものと見なし、そのバランスは普通の人間では行動規制において後者に傾く。非文明化の過程は、バランスの傾斜が外的束縛に有利にもどることである、と定義づけられるかもしれない。しかし、どちらの場合にも内的束縛の作用は、もし外的束縛（他の人々の行動）のパターン化において変化が起きれば、不変の状態にはならないであろう。外的束縛の予測は、行動設定においていつも役割を演じる。そして、もしその予測が突然、もしくは徐々に違った結果を生み出せば、行動は変わることになる。⁸

エリアスによれば、文明化の重要な問題は人々がさらされている束縛を分析することであり、その際、４つの束縛、つまり人間の動物的性質によって人間に課せられる束縛（食欲や性欲など）、人間以外の自然環境に依存することで人間に課せられる束縛（食料の獲得や悪天候からの防御）、人々が社会生活においてお

互いに行使し合う束縛（人間の相互依存による社会的束縛，経済的束縛），社会的習得を通じて人々に課せられる束縛（自己抑制の装置としての理性や良心）が挙げられる。その中でも文明化との関係で重要な位置を占めるのは外的束縛（他者束縛）と内的束縛（自己束縛）である。⁹後者，すなわち，内面化される自己抑制は文明化の過程で，つまり，発展段階が違う社会によって変化する。それはまた発展段階の異なる社会における外的束縛と内的束縛の関係についても言える。未発達な農耕社会よりも分化が進んだ産業社会では内的束縛，すなわち自己抑制の度合いが高くなる。たとえば，族長，トーテム，先祖，霊媒，神々などが発展段階の低い社会では外的束縛を保つ圧力になる。父親に体罰を与えられる子供は自制に欠け，敵意や憎悪の衝動で行動し，成長すれば同じく自分の子供を暴力的に扱いやすいが，説得による教育は子供に内的抑制を教える。また政治と暴力にも相関関係があり，人間の自制の習得率が政治機構に影響を与える。かくして，絶対主義体制では人々は外部の規制によって支配され，逆に民主主義の発展した多数政党社会では自己抑制の度合いが高くなる。より多く自制を内面化する人格構造への変化には長い時間が必要である。¹⁰

こうしたエリアスの説明を念頭に置くと，文明化の過程と非文明化の過程の関係がより分かりやすくなる。つまり，長い時間を要する文明化された社会（自制の発達した社会）も，比較的，短期間の非文明化の圧力にさらされれば，崩壊しやすいということが理解されよう。非文明化の圧力を生み出すものが何であるかについては，ここでは詳しく論じないが，それが，長引く経済不況，政治革命や宗教的対立や国家の内紛による暴力の応酬，連続して起こる自然災害などによって社会不安を増大させるということが分かれば差し当たり十分であろう。したがって，ナチズムの暴力は，ドイツ人固有の国民的性格によるものではなく，むしろドイツの歴史において非文明化の圧力や勢いを生み出すような複合的な人間の相互依存の連鎖と関係があったのであり，そうした状況は，先述したように，条件さえ同じであれば，ドイツ以外の国でも起こりうるということが理解されるべきなのである。

さらに「非形式化」(Informalisierung/informalization) の概念がこれに連動しており，エリアスがこの重要な概念を『ドイツ人論』において文明化の過程との関

係で定義づけていることにも注目する必要がある。¹¹その具体的な内容と事例については後で詳しく論じるが、それが、分化と文明化の度合いが進んだ現代の産業社会における「内的束縛」の増大、つまり自制のさらなる拡大と強化に関連していることをわれわれは理解しなければならない。端的に言えば、非形式化の傾向は特に1960年代から70年代かけていわゆる先進国で進行した現象である。現代産業社会の画一的な文化や生活様式に反対するアメリカの「カウンター・カルチャー」や「ヒッピー文化」などがその例である。若者の間では服装・男女関係・婚姻・人間関係などにおいて伝統的な基準化や制度化に反対する風潮が顕著になった。文明化の過程を比喩的に描写する「かつて許されたことが現在では禁じられる」というエリアスの表現が、「かつて禁じられたことが現在では許される」という表現に置き換えられ、それが現代社会の「野蛮化」、つまり文明化の逆行を示唆するものと解され、少なくとも、文明化の過程の理論を疑問視する声が上がった。¹²が、エリアスは、伝統的な道德や制度へのアンチテーゼは現代社会の「野蛮化」ではなく、新しい制度を自ら創造することで若者自身がその責任をますます負わなければならない現象、換言すれば、彼らがよりいっそう厳しい自制を要求される現象であると論じる。要するに、エリアスにとって非形式化の過程は文明化の過程と矛盾するものではないのである。われわれは一般に古い制度に則って結婚したり、就職したりする方が楽なのである。それを否定して非形式化を選べば、それだけ人生における圧力、緊張、葛藤の度合いは高まる。

エリアスは、非文明化の過程や非形式化の過程について、他の論文や著書でも間接的に論じてはいるが、具体的な例を示しながらそれらの概念を詳しく説明したのは『ドイツ人論』においてであり、その意味でも本書は『文明化の過程』と相補的な関係にあり、『文明化の過程』に関連して発せられたさまざまな疑問に答えるという形でも重要な役割を果たしているのである。その答えの1つは西洋の文明化は、絶対的ではないし、直線的に進行したわけでもなく、常に非文明化の圧力と共存していたということである。それはまた「文明の衝突」という表現ではなく、むしろ「文明化の挫折」という表現によって理解されるかもしれない。しかし、それは否定的で運命論的な人間社会の帰結としてではなく、その逆の方向に向かうベクトルとして、つまり創造的で発展的な未来志向の運動にも転

化しうる力学として認識されなければならない。少なくともその可能性は1990年代以降、再び統一国家として生れ変わったドイツとドイツ国民に委ねられているのである。それでは、次に『ドイツ人論』に付け加えられたエリ阿斯自身の序論に依拠して本書の目的や趣旨を再定位してみたい。

そこには国家社会主義が台頭する以前と以後のドイツの国民性が相互関連的に、社会発生と心理発生の観点から簡潔に論じられ、本書の中心的テーマとして浮き彫りにされている。この間、彼らが個人としてではなく、国民として受けた内面的衝撃や「恥の観念」はドイツ人独特であり、エリ阿斯はそれが彼らの行動様式や価値観にどのように反映されているかについてだいたい次のように見る。

ドイツ人にとって1918年の戦争の敗北は予期せぬほど大きな外傷体験となった。それはドイツ国民のハビタスの中核に打撃を与えるものだった。それはドイツ人の弱さの時代、外国軍の侵入の時代、偉大な栄光の陰で暮らす時代への回帰であった。ドイツの復興は危機的であり、ドイツの上・中流階級はこのような恥を忍んで生きることはもはやできないと感じていた。ワイマール共和国を支えたのは社会民主主義的な労働者階級であり、ユダヤ人を含みりベラルな中産階級の数に限られていた。ヒトラーを支持した大部分の人間は上流や中流階級に属していた。しかし、彼らだけではベルサイユ条約を破棄し、復讐戦争をするのは無理で、圧倒的多数の大衆を引きつける指導者とその戦術が必要であった。彼らはヒトラーにそのチャンスを与えた。神聖ローマ帝国と、戦争で崩壊したビスマルクのドイツ帝国の後に、ヒトラーの下で第3帝国が出現するという希望があった（それもつぶれたが）。

なぜドイツ人はこうした偉大な帝国に幻想をもつようになったのか。その問いに対する答えを引き出すために、エリ阿斯は、『文明化の過程』でもそうであったように、ドイツの社会発展（文明化への）を、イギリスやフランスのそれと比較する。たとえば、イギリスの首都ロンドン、ウィリアム征服王の時代から政治経済の中心地として重要な機能を果たし、パリもフランスの首都として、フランス革命でその貴族的な伝統が断たれたとはいえ、芸術や文化の模範となり、宮廷貴族が残したフランス語の伝統もその後、ブルジョアが権力集団を形成するときにはモデルになった。一方、新興国ドイツでは、17、18世紀の政治・外交上の

勝利によってベルリンが第2帝国の首都として建設されたが、この若い首都よりも、ハプスブルク家の古い町ウィーンの方が重要視されることもあった。つまり、総じて中世に登場したドイツの他の町や都市の生活様式や業績はヨーロッパの国家発展の重要な要素にならなかったのである。

さらにエリアスは、ドイツの都市とオランダの都市を比較しながら、両国の国家形成と国民のハビタス形成に関して重要な指摘をしている。民族・言語・文化の面で類似性を共有しているのに、両国は文明化の過程でかなり違った方向に向かったのであり、それは、国家形成の過程と個人の人格形成の過程が不可分であるというエリアスの見解を裏づける。ここでは、オランダやスイスの富裕な市民階級の一部が社会的ヒエラルキーの最高位につき、自分自身の住む都市だけでなく、共和国全体を支配し、かくして中世の伝統を市民に継承させたという点が、ドイツの都市の発展に比べて、重要である。エリアスはオランダがたどった文明化の特殊な方向を次のように捉える。

オランダの連合諸州は議会政治の一形態であり、人々は武器よりも言葉の力を重要視した。アムステルダムやユトレヒトの市民はその伝統をオランダ国民のハビタスに注入した。交渉や妥協に支えられた統治技術が都市から国家へと移り、ドイツとは逆にそれが命令と服従の軍事的モデルに取って代わった。それは親子関係にも影響し、オランダの子供はドイツの子供よりも多くの自由が与えられた。そうした風土はまた、たとえばユダヤ人やカトリック教などの他民族、他宗教も寛大に扱うオランダ人の気質を生んだ。彼らは、軍人貴族や宮廷貴族と競争し、下の階級にも偏見を抱くドイツのブルジョア的中産階級とも異なることになった。それに比べるとドイツの事情は非常に異なり、エリアスはそれをさらに強調する。

哲学や文学の古典期はドイツの社会発展のある段階を示すもので、その時期に宮廷貴族と中産階級の反目が高まった。中産階級は軍事的行動や価値を拒絶し、その大部分は政治・軍事活動から遠ざけられ、両者の対立はドイツでは階級闘争に近かった。今日では、ブルジョアとプロレタリアの経済対立が注目されるので、そうした反目は目立たないが、18世紀の絶対王制の時代は、こうした対立が文化・文明的であると同時に経済的でもあった。概して、ゲーテ以外のドイツ

古典文学運動の代表者は政界で要職に就くことを拒否され、彼らの部外者の地位が彼らのロマン主義に反映された。それは非常に自由主義的、理想主義的な傾向と、国家主義的な傾向とに2分された。とりわけ分裂状態のドイツの国家的統一には彼らにとって重要であった。が、これらの計画はいずれも挫折し、その敗北感や劣等感が中産階級に深く残った。普仏戦争の勝利も市民のものではなく、ビスマルクを顧問官とするプロシア国王の勝利であった。かくして、ドイツ市民の多くは軍事的エリートに支配される第2級の、従属的階級として帝国の社会秩序に組み込まれた。自分たちでは国家統一が果たせなかったこと、それが軍事的貴族によってなされたことが、彼らにコンプレックスを与えた。その反動として、彼らは、古典的理想主義から明白な権力のリアリズムへの決定的変身を遂げた。

ここでエリアスは、どのような過程を経てドイツ国民が非文明化の方向へ、つまりナチズムの破壊的な暴力支配へと導かれたかを間接的に語りながら、非形式化と非文明化の過程との関連性をも示唆している。ドイツの中産階級の貴族的ハビタスへの変身には誤解があり、彼らは本来、軍人に要求される節度のある自制心や適応能力ではなく、権力や暴力の行使を支持したのである。それはつまり、彼らが貴族や軍人の真のエトスを歪曲し、権力の神話にすり替えたこと、言い換えればそれを非形式化したことを意味する。例を挙げれば、武士階級でない人間が武士道の精神を皮相的に解釈し、それを「強さ」の象徴として崇めることに似ている。こうした危険な錯覚や幻想が戦争の敗北による政治的・経済的危機を通じてさらに膨らみ、強いリーダーを求める背景ができたのである。それは個人ではなく集団的な行為であるがゆえに、戦争が終わってもドイツ人の「われわれ像」として、今度はナチスの蛮行に加担した共同責任という形で、彼らの罪の意識を倍加するのである。

こうした状況からエリアスは、われわれが完全に個人であるという認識が嘘であり、われわれは好むと好まざるにかかわらず、集団の一員である、という結論に達する（それはまた彼の社会学理論の根幹でもある）。ドイツ人の場合、昔からあったドイツ人としての意味や価値への懐疑は、今もさらに大きくなり、この問題が公然と語られないがゆえに、解決を難しくさせているとエリアスは言う。ここでは個人の心理的コンプレックスが集団のそれに置き換えられる（実際エリ

アスの社会学理論には、集団心理学への応用という形でフロイトの心理学が深く係る)。さらに、ここでエリアスは国民のアイデンティティや国家的プライドとは何かという重要な問題に言及している。植民地を失ったり、過去の栄光がなくなったりする国家には過去の栄光を懐かしむ傾向があり、それが国民の人格構造に浸透するという表現で彼はそれについて論じるが、現段階ではこれを解決してくれる有効な社会科学の方法はないかもしれない。それゆえ、少なくともマルクスやレーニンの言う国家の消滅、国家の廃止という予言が幻想に過ぎないことも分かる。¹³国民が栄光とプライドを喪失し、屈辱感を内面化すれば、それを治癒するには長い時間を必要とする。たとえば、第2次世界大戦後のドイツや日本のように経済活動に邁進すれば、こうした屈辱感が一時的に忘れられるかもしれない。国家が暴力独占によって和平化に到達するには時間がかかるが、国家間の対立・抗争でそれが壊れるのは早い。こうした状況はまた、国内の暴力は取り締まることが可能でも、国家間の暴力を規制するのは難しいというエリアスの表現が、単に冷戦構造の時代だけでなく、今日の国際関係にも当てはまることを示唆している。些細な問題で国家同士が止めどもない暴力を誘発する感情の二重拘束に陥ることもある。その場合、経済的な利害関係ではなく、むしろプライドと「恥の観念」がそのような集団行動を支える大きな要因にもなりうる。『ドイツ人論』の理解はこの問題と関連しており、エリアスが示す事例はそれを探究する手掛かりになる。それに関してエリアスはさらに次のように論じる。

決闘は中世ではヨーロッパの貴族の国際的文化に遡る制度であったが、ドイツ以外の国では、中産階級の隆盛によって段々重要ではなくなった。しかし、ドイツでは非貴族的な学生の間でも人気のある制度であった。年配の大学の教師にも顔に決闘の傷跡があった。学生や将校はヒエラルキーの社会で生きており、人間の不平等に慣れていて、社会的に許される暴力の形態、社会的不平等の蔓延はヒトラー政権到来の必須条件であった。

決闘の習慣そのものはそれほど驚くべきことではない。それは日本の武士の果たし合いのような習慣を髣髴させる。問題は人間の不平等を助長するような制度が現代の国民国家が成立した、文明化された時代にも残存し、それがドイツの国家像、ひいては国民の人格構造を形成したということである。国民の人格構造の

形成過程を、国民の歴史に、つまり国家形成の過程に対応させる方法は一般的ではないが、今日の問題はずっと昔から起こった歴史的事件と係っているがゆえに、エリアスはその方法に準拠するのである。それはまた、現在とつながっている未来において、原子力問題や環境問題など人類が抱えている大きな課題にわれわれがうまく対処する方法を示唆するのである。そのためにも過去の歴史に遡ることが必要なのである。エリアスによれば、国家の運命は、国民個々の人格構造に沈澱しているので、社会学者にはフロイトが取り組んだような診断が必要であり、個人の発展における葛藤に満ちた衝動規制の、人格構造への影響をフロイトが分析したように、国家と国民全体の関係が論じられなければならないのである。非形式化の過程をさらにドイツの歴史に遡って明らかにしてみよう。

エリアスは非形式化の傾向に関連して男女間の関係、若者と年配者などの関係に注目し、第1次世界大戦以前のドイツの大学では、中産階級出身の学生が決闘団体 (satisfaktionsfähige Gesellschaft) に属し、「決闘申し込み・受諾能力」を与えられ、決闘の訓練をしていたと言う。彼らには2種類の女性がいて、一方は同じ階級に属し、公式的な方法以外には手を出すことが許されない女性であり、他方は自由に関係のもてる売春婦や労働者階級の女性であった。ドイツでは上級公務員や軍人が金持の商人や銀行家よりも地位が高く、帝国時代には父母や先祖の家柄も高い地位につける条件であり、それに属する収入の高い親が息子を大学に入れるのは当然であった。皇帝の時代には商人や産業家は上流社会から身分の卑しい者として軽蔑されていた。学生の結婚相手も当然、上流階級の令嬢の方がふさわしく、戦闘的な学生団体に入ることはドイツ社会の定着者として社会から認定され、名誉を与えられた。イギリスのようにモデルを提供する都市の上流階級もないし、パブリック・スクールの教育規範もないドイツでは、この戦闘的な学生団体が上流階級のモデルになり、「決闘申し込み・受諾能力」がそのシンボルになった。産業が発達し、国家権力による暴力独占が進んだ他のヨーロッパの国では、決闘という戦士の気風は無用となったが、近代化と国家統一の遅れたドイツではそれが残った。国家の定める法と秩序に対抗し、自分たちの規範や価値、自分たちの階級的優位を誇示するために決闘が象徴的な役割を果たした。帝国の法によって個人的な決闘は禁じられたが、国家機構の中枢部はそうした能力をも

つエリートに握られていたので、決闘は見ても見ぬふりをされていた。

ここで興味深いのはエリアスが、この戦闘的な学生団体の規範が有力となる時代のドイツ社会のメカニズムを、「宮廷社会」の権力構造を支えるそれと比べていることである。つまり、マナーやエチケットが支配的な規範となったフランス宮廷社会が、武人的能力に代表されるエリート層の規範が支配する帝政時代のドイツ社会と、構造と機能の点で比べられているのである。したがって、市民階級がフランス宮廷社会で「部外者」扱いされたように、軍人や官僚が支配するドイツ社会では、商業や産業や実業に従事する階級が二流扱いされたのである。さらに、ここでわれわれは、文明化の過程の理論、つまり、文明化が直線的には進まないというエリアスの見方が、産業社会と戦士社会の奇妙な混交として存在しているドイツ社会を例として、具体的に示されていることに注目すべきである。宮廷社会の頂点に立つフランス国王（太陽王ルイ14世）と国王を支えるさまざまな種類の宮廷貴族、およびその外に位置しながら上昇の機会を窺う市民階級（あるいは農民階級）が織り成す相互依存のネットワークが、最高位に立つドイツ皇帝（ヴィルヘルム2世）と国王を支える軍人や官僚、これらのエリート層に軽蔑されるが、戦争時代にやがて同じハビタスをもつことになる産業・商業階級（あるいは労働者階級）が織り成す相互依存のネットワークと社会学的に一致するのである。

さらに、エリアスによると、この自己抑制の規範をもつ学生の決闘クラブは軍事部門と公務員部門に分かれ、ドイツ皇帝の人格を頂点としてドイツ政府のピラミッドの上部を形成していた。地位の安定性や国家組織の安全性はないが、儀式の厳格さ、祝祭の儀式性、結婚式の服装などの点でそれはフランス宮廷社会に類似していた。以前は貴族的価値観に反対していたドイツの中産階級も、反抗を持続するというより、むしろ同じ貴族的規範に染まるようになり、戦士の気風を吸収したり、人間の不平等を是認したり、弱者に対する強者の優位を受け入れたりするようになった。こうして、中産階級と貴族の間に行動様式の点で共通性が生れ、それがドイツの学生の名誉や決闘の規範を基準化した。

かくして、階級の異なる、対立的な社会集団の間に価値観や行動規範の混合や融合がエリアスの言う非形式化の傾向を生み、後には労働者もそれに参入するこ

とになる。同時に貴族の方もその行動パターンを市民階級のそれに合わせ、それが、ドイツ人の国民的気質に発展したのである。ここでは行動様式や感情表現の規範の非形式化が「ブルジョア化」という形で進行したことに注目すべきである。一方、またエリアスによれば、国法や法廷に頼らず自分たちの名誉規範に基づき武力を行使して国家の暴力独占に対抗しようとする貴族の決断は、自己集団が社会的高位者であるという自負心のみならず、国家機能の権化であるという誇りを助長した。つまり、彼らは国家の暴力独占という公式の制度に対抗することによって、それを非形式化したのである。他のヨーロッパの産業国では廃れていた決闘の習慣がドイツに残り、それが貴族ばかりでなく将校団や中産階級の学生決闘団体によって受け継がれたのである。ドイツではそれは、肉体的強靱さ、戦いを潔く受け入れる勇気などの男性的価値規準を生み出し、より平和的な競争や社会的戦術、議会での舌戦などの説得技術は軽蔑に値するものであるという考えを普及させた（エリアスはここでもドイツ人の国民的気質とイギリス人のその違いが、両国の国家形成と文明化の方向性を変えたことを示唆している）。

ここでは貴族の名誉の規範が司法当局よりも優位に立ち、国王さえもそれを容認せざるをえなくなったという状況に注意が喚起されなければならない。なぜなら、それはさらに決闘の習慣に価値を置く学生団体の男性的規範を助長し、こうした上流貴族の規範の非形式化を通して、国家の暴力独占の機能が奪われるからである。加えて、絶対主義的な専制政治が長く続き、命令と服従の伝統的規範が支配したドイツでは、国民の人格構造が独裁的かつヒエラルキー的な社会秩序に合致することになった。つまり、個々の人間の人格構造にもそれが反映され、かくして、こうした社会規範で社会問題を解決する風土が生れたのである。さらに、非形式化の心理発生的な側面をエリアスの視点から分析してみたい。

こうした上流貴族の形式化された決闘の習慣は、ある種の社会機能であり、自分の階級を低い階級と区別するシンボルになる。それぞれの成員は規範を守るための自己規制、自己抑制を求められ、その代償として個人的価値の感情が高められる。こうした自尊心が幼少期より習得され、この戦略の実行によって、上流階級の自尊心を継続的に再確認することが必要になり、同時にそれが彼らの団結力を高める。こうした状態は上流階級の「定着者」としての権力が崩れ始めるとき

にさらに明確になる。上流階級の若い世代は伝統的な価値観やそれを守るために要求される自己犠牲を疑問視し始める。かくして、上流階級の規範に従う能力、それが課する圧力に耐える能力が減退し、非形式化が始まる。こうした非形式化の過程は、植民地化によって、未開社会の人々の生活を支えていた共通の信仰や儀式の意味が破壊されるときにも起こる。同じことは伝統社会の集団の価値観が他集団の侵略によって全面的に失われる時にも起こるのである。その場合、外傷体験による精神的なショックから人々が立ち直り、彼らの心の傷が治癒されるまで長い時間を要するのである。

プロテスタントの布教活動によってこうした例がメラネシアで起こったことが、イギリスの人類学者によって報告されており、それに基づいてエリアスは、その場合に活気を失うのは個人ではなく、集団全体であると述べ、ヨーロッパの歴史でも同じような例がありながらも、現実の歴史は勝者の側で書かれ、敗者の観点が反映されていないことを指摘する。また同様に、生活様式の多様化に伴い、上流階級の生活様式が中流階級や下層階級に取り込まれたり、逆に中流階級や下層階級の行動様式と感情表現が上流階級にも及び、社会構造が変化したりすることがあるが、こうした社会変化を研究する方法はまだ十分に探求されていないと述べ、現代社会が抱えている重要な社会学上の問題を彼は提起する。つまり、ここでは一方的で、直線的な非形式化の傾向にのみ焦点を合わせるのではなく、非形式化と形式化の2つの勢いがそれぞれ作用していることが注目されなければならない。

さらにエリアスはドイツ社会のあらゆる領域でこうした非形式化の傾向が進行したことを例証する。マナーやエチケットの厳しい規定がヴィルヘルム2世の時代に上流宮廷貴族の間で強くなり、それは競馬、狩猟などのスポーツにも及んだ。そして、それを実現するのは「決闘申し込み・受諾能力」をもつ有力な宮廷社会であり、こうした習慣が中産階級の上層部に引き継がれ、やがてそれは、国家社会主義者が粗雑化された形で推奨する「アーリア的精神」を具現する貴族的人間像とともに、ドイツ国民全体の規範の一部を成す。一方、帝国の終わり頃には女性の服装にも非形式化の波が押し寄せた。宮廷社会ではだいたい上流階級は服装やモラルなどあらゆる点で普通の人と違っていたが、現代の産業国家では、

軍人や貴族の体制が成立した時代よりもそれがますます非形式化し、戦いはむしろ中産階級と労働者階級の間に移る。

こうした非形式化の過程は産業が発達した現代の先進国ではどこでも、科学的知識やテクノロジーの普及によって急速に進行し、封建社会や宮廷社会に比べれば、生活様式や生活規範のレベルで上流階級、中産階級、労働者階級の間に差がなくなり、その影響力の方向を認識するのは難しい。しかし、エリ阿斯はドイツにおける非形式化の過程を示す際に、マナーやエチケットなど日常生活の行為から生じる人格構造の変化が、国家を支える国民全体のイデオロギーの変化と同時に進行する相互依存的な側面を強調する。そうしたネットワークの中で、かつては学問と教養を重んじ、上流階級から排除されていた18世紀のドイツの人文主義的な中産階級は、20世紀の初期には、決闘の習慣に価値を求めるエリート貴族の規範に従うことで、自らの立場を変え、かつその政治的な方向を、世界や人類の進歩という普遍的な平和主義者（カントの理想）から、個人や自国民の名誉と栄光を重んじる偏狭なナショナリストに変貌したのである。中産階級が初期に信奉した人間主義的な道德規範は、こうした非形式化の過程を通じて社会的に身分の低い、劣った人間の弱さを代弁するものと見なされ、弱者や失敗者は滅びるべきであり、それに加担するキリスト教は悪である、というニーチェの哲学に取って代わられた。つまり、ニーチェが称揚した武人的貴族の行動規範は皮肉なことにプロシア時代の実践的軍事技術として、貴族の虚飾に満ちた文明化の規範を拒否し、自らの創造的文化概念に閉じこもった中産階級によって実用化され、支持された。そして、後にはこの非形式化の過程に労働者階級も組み込まれ、「弱さは悪であり、力は善である」という結論が、幻想的武人氣質とあいまってドイツの国威発揚を推進し、やがて国家社会主義への道を用意したのである。

（3）ナショナリズム、ファシズム、文明化の挫折

『ドイツ人論』の第2部は「ナショナリズムに関する論争」と題され、「文化の歴史と政治史」、「人文主義者からナショナリストに変貌する中産階級エリート」、「国民国家の標準規範の二重性」という比較的短い3つの章から成っている。い

ずれも1960年代後期に書かれたもので、分析の対象は違うが、ナチズムの悲劇を生み出したドイツの歴史的経緯を説明するという点では、第1部とつながりがある。エリアスは文化史と政治史の対立を、普遍的な価値のある文化に意味を求めるドイツ中産階級と、政治外交の戦術や技術を重要視する貴族階級との構造的対立と見なし、文化史の概念をドイツ中産階級の理想主義が体現されたもの、政治史の概念を洗練されたマナーを武器とするドイツ貴族の政治的現実主義の表れと解釈する。ヨーロッパにおける両者の競合関係をエリアスはだいたい次のように解釈する。

18世紀の中産階級に属する知的エリートは、マナーの点で宮廷社会に同化しながらも、文化的理想の実現をより良き未来に、つまり進歩の概念に求めた。18世紀の啓蒙主義者の進歩の概念に国家の理想化されたイメージが投影されたが、ヨーロッパの中産階級が支配者階級になると、他の支配者階級と同様、彼らは未来よりも過去を志向し、理想化した。未来志向から得られる感情的満足が、過去を志向することで得られる満足に取って代われ、共同幻想としてのナショナリズムが生れた。貴族たちが家名や決闘に誇りを抱いたように、彼らは、ある時は上昇してくる労働者階級と力を合わせて理想的な「われわれ像」をナショナリズムに求めた。その像はヨーロッパの国々で多少違うが、「ドイツ文化」、「フランス文化」などの永遠の国家的特性に言及しているかぎりでは同じであった。ところが、産業化、都市化を経て権力の座についた彼らのナショナリズムが、宮廷社会の独占的な名誉の規範に対置されなければ、国民国家における社会変化は理解されないのである。つまり、中産階級の広義の政治・経済・文化的権力、道徳規範が宮廷社会の伝統に吸収されるのである。

エリアスは、こうしてナショナリズムの発生過程を見る際にも宮廷社会と市民社会を完全に対立するとは捉えないで、両者の相互依存関係を重視する。2つの階級はさまざまな点で一見、異質であるように思われるが、行動規範や思考における自制や合理性を受け継ぐ。同じことは20世紀の高度に発達した産業社会の中でも中産階級と労働者階級の間で起こるのであり、再びそこに非形式化への文化的変化が生じ、国民国家におけるナショナリズムの発生にとってそれが重要な手がかりになる。エリアスが言うように、中産階級は独立した、単純な単位ではな

く、いくつもの下位集団に囲まれ、労働者階級の台頭で変化にさらされるのである。こうした中で国民的感情をアピールすることは社会の主導権を握る階級にとっては重要である。さらに、高度に発達した産業国家、生活レベルの高い国民国家では、国家主義的信仰と価値システムがたいてい過去に向かう、とエリ阿斯が言うとき、それはロマン主義文学の発生、国民的神話や伝説の系統的研究の登場などについて考える場合、説得力がある。¹⁴したがって、哲学や思想の歴史もそれを国家の存在から切り離すとうまく理解できないのである。それゆえ「ナショナリズムは19、20世紀の最も強力な社会的信仰である」という彼の発言も正しい。それだからこそ、テクノロジーの発達した社会でも国家の神話性、宗教性が存在し、ドイツのファシズムのみならず、数多くの疑似宗教的国家主義が発生し、さらにはある国民が別の国民に暴力を行使して自らの恥を雪ぐことにもなるのである。

エリ阿斯によれば、ナショナリズムの問題に取り組む際に個人と国家の問題を、今日の心理学や社会学がそうであるように、「アイデンティティ」という概念を使うと、現状を誤解する恐れがある。なぜなら、その言葉は国家と個人を切り離して考えるからである。それは母と子供のように分離した関係ではなく個人が「自己像」をもつと同時に「われわれ像」、「われわれの理想」をもつからである。その2つは不分離、不可分の関係にあり、それが今日の産業が発達した国民国家に見られるのである。したがって、ナショナリズムはコミュニズム、ソーシャリズム、リベラリズムとは異なる特徴をもち、それは国家間の関係を主軸とする。それは他の主義や思想とも交わるが、政治におけるその影響力は決定的であり、エトスや感情の国家主義化は、19、20世紀の産業国家で起こる。その場合、国民国家の規範が、平等主義的な人間主義と、マキアヴェリ的君主政治、非平等主義的な貴族の規範との間で衝突する。したがって、嘘つきや偽善者になることがナショナリストの政治技術には求められる。

こうした状況を背景に、エリ阿斯は、ナショナリズムの解釈に当たって、近代市民社会の理想主義的な道德規範が、旧貴族の戦士の気風と同居し、ある種の二律背反的な状態を生み出すことを指摘している。つまり、国内では人間主義的な道德律が支配し、対国家関係では絶対主義的な貴族の精神が支配するのである。

エリアスはその事実を、王朝や貴族政体からより民主主義的な国民国家に変化した国家では、二重の相矛盾する道德規範が特徴的である、という表現で指摘する。こうした政治の変化過程は英独仏などの多くのヨーロッパの国で起こったことであり、それが理解されなければ、国家社会主義とヒトラーの登場は、先にも触れたように政治史の異常現象として、歴史の唯一無二的な事件として扱われることになる。それがきわめてドイツ的な様相を呈したのは、ドイツの国家形成の過程が英仏のそれとは違っていったこと、さらに、非文明化や非形式化の傾向も過去の歴史的経緯からドイツ的なものにならざるをえなかったことを示唆するのであろう。その違いをエリアスは——その他の著書でもそうであるが——イギリスの文明化の過程との比較で説明する。端的に言えば、この矛盾する規範をイギリスはさまざまな方法と技術——文化面での貴族と市民の間の交わりなど——によって矛盾がないかのごとく切り抜け、ドイツはそれができなっただけである。ドイツは一方の方向に極端に傾きすぎたのである。

第3部「文明化と暴力——物理的暴力の国家独占とその逸脱」では、エリアスは、ナチスが国民的エトスを助長することで現代国民国家の理想そのものをくつがえしてしまったという最も重要な問題を扱い、さらにそれが第2次世界大戦後のドイツ連邦共和国においても、世代間の対立を通して国民を解決の難しい状況に直面させたことに注目する。ここでも中産階級の理想的道德律と、ナショナリズムの底流にある貴族の武人的エトスとの対立は、非形式化、非文明化というキーワードに連動する。エリアスは、まず国家の和平化による「外的束縛」が自己規制としての「内的束縛」を促し、一方では文明化された国家内部で暴力独占が行われ、他方ではまだその暴力規制が、国家間では十分でないという前提から議論を開始する。つまり、国家内部の暴力は法によってある程度規制されても、国家間の暴力規制は難しいという、両世界大戦や冷戦時代の政治状況から彼が引き出したと思われる教訓がここでも大きな位置を占める。これはグローバリゼーションを迎えた今日の国際関係や国際政治においてもなお慎重に議論されるべき問題であるが、1990年代から21世紀の初めにかけて頻発した政治や宗教の対立をめぐる国家間の暴力の応酬、テロリズム、異民族間の大量虐殺や民族浄化という忌まわしい事件を念頭に置けば、それほど非現実的とは言えない。が、エリアス

はここで国家によって規制される暴力と規制されない暴力の2種類を分離し、二分法的に扱っているのではない。ここでも2つの傾向が相互に依存し合い、葛藤や分裂を生み出すのである。人類が個人と集団の両レベルで、国際平和のために多大な貢献をし、そのための世界的な規模の組織や機関を設立してきたことは事実である。問題はエリ阿斯が強調するように、個人の努力が意図されない、無計画の結果を生み出すことであろう。

エリ阿斯によると、ドイツでは統一国家としての自信や誇りが他国民ほどなく、その国民総体の弱体意識が戦争に勝つことで、つまり暴力を対外関係に向けることで優越感に変わりやすかった。が、ドイツの中産階級の政治的立場は弱く、貴族の武力的優位性に依存せざるをえなかった。つまり、彼らはかつての理想主義的道德律を捨て、貴族の戦士のエトスや規範に拝跪し、貴族本来の責任感や威厳ではなく、単なる権力に魅せられた。政治的手段として暴力の行使は正しいという結論に彼らは達した。権謀術数という貴族の外交手段が権力の模範としてロマン化され、普仏戦争で看護兵として志願したニーチェはそれを『権力の意志』において表明した。一代では貴族になれない上流中産階級に貴族の戦士のエトスが浸透し、ヴィルヘルム皇帝時代に書かれた、決闘を助長する多くの小説にもそうした好戦的傾向——敵の兵士は人間でなく、動物であり、味方の兵士のみが人間として扱われる傾向（シラーの小説）——が現れていた。ところが、アメリカの参戦によりドイツは第一次世界大戦で惨めな敗北を喫し、貴族的な伝統も終わり、皇帝も廃位されて大きな外傷体験が残った（だからこそ失われた昔の栄光を取り戻そうとする共同幻想が強くなる）。戦争に負けたとはいえ、貴族の伝統である「決闘申し込み・受諾能力」はかつて除外されていた商人や実業家にもすでに浸透しており、この国内外の敗北を受け止める用意はなされていなかった。加えて旧支配者階級の権威の失墜は、部外者であった労働者階級の台頭によって、さらに激しい、非現実的な抵抗を生み出した。経済的な理由だけでなく、かつて見下していた階級と同じ地位に格下げされることが彼らの威信を傷つけたからである。

こうした状況はワイマール共和国における極右グループ——退役軍人から成る「義勇兵団」(Freikorps) がその一つ——のテロリズムに代表される暴力の時代の

到来を知る上で重要である。¹⁵「義勇兵団」とその傘下にある学生組織によって多くの人々が殺されたのである。その代表者は周知のごとく、有名な共産主義者であったカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクである。「決闘申し込み・受諾能力」という戦士の気風を体現する「義勇兵団」と学生の決闘クラブは、一方ではワイマール共和国の民主主義的な議会主義を、妥協や単なるおしゃべりによる政治、他方では共産主義者を弱虫、社会的敗北者、もしくは敵のスパイと見なし、自らの戦士の規範である「権力への意志」に従って、暴力による政治に走ったのである。彼らの武人的な行動様式と暴力を手段とする政治方針が第3帝国とその指導者の道を用意したことは言うまでもない。ここで注目すべきことは、文明化された人間社会が、短期間の暴力によって野蛮な時代へと逆行することがありうるというエリアスの社会的な洞察力である。つまり、直線的に進行する生物学的進化の過程は、人間社会を理解する上では応用できないということ、また少なくともエリアスの社会学理論は社会進化論的な発想とは無縁であるということである。換言すれば、人間が自然を理解する能力、社会的関係を理解する能力、自己抑制を行う能力は、必ずしも同時に進行しないということである。たとえば、ナチスの例に見られるように、人間の自然理解の能力が高くても、社会関係における文明化が遅れたり、逆行したりするということである。

したがって、エリアスが指摘するように、文明化された行動様式や人間の良心が崩壊する方向を見据えることが重要なのである。その方向は「野蛮化」と「非人間化」の過程であり、文明化された社会ではそれはかなりの時間を要するのである。またその過程は短期的で、静態的な分析や主意主義的な説明では十分に理解できないのである。ワイマール共和国時代の、国家的規制を越えたテロリストの暴力行為、さらにまた、ヒトラー時代の国家的暴力行為にもつながるあの「義勇兵団」の発展過程をもしわれわれが理解するなら、あの大いに野蛮な行為よりも前の、長期にわたって築き上げられた時代が、ある程度解明できるのである。

エリアスはさらに「文明化と暴力」という同じ脈絡で、1960年代、70年代のドイツの左翼学生運動が直面した問題を、国家社会主義の成立と崩壊がもたらしたドイツ人の複雑な心理的状況との関連で論じている。そこには中産階級の青年の未来への不安、自分の将来への不安、意味のある生活を送ろうとする期待感など

が入り混じっているとエリアスは言う。そこで彼は、極右グループがテロリズムに訴えたワイマール共和国の時代背景と、同じく暴力的な極左の学生運動が起こったドイツ連邦共和国のそれを比較し、両者とも孤立した運動ではなく、一方が独裁的産業社会で、他方が非独裁的産業社会で起こった運動であり、それぞれ構造的に関連していると見なす。さらに、ドイツ連邦共和国におけるテロリズムを伴う若者の反体制運動は、ヒトラーの時代のファシズムへの反動と重なるものであるが、それは同時に若い世代の人生における意味の喪失に関連し、その意味の喪失はまた、右派であれ、左派であれ未来の都市ゲリラや急進的運動に賛同者を送り込む領域を生み出すとエリアスは言う。現代ドイツの若者が直面する人生の意味をめぐるこの問題は、ワイマール共和国前後、およびナチズムの時代の若者が直面した同様の問題と比較され、第3部の補遺5の中で「ドイツ連邦共和国のテロリズム——世代間の社会的葛藤の表現」という表題で本格的に議論されており、それはドイツのみならず、急速に変化する世界の産業国が抱える共通の問題、つまり世代間の対立という領域を扱っている。端的に言えば、それは「若者の反抗・反乱」であり、今でも解決の難しい社会心理的、あるいは社会文化的な問題である。エリアスは現代ドイツの若者が支持する反体制運動の根拠とそのイデオロギー的な方向性、およびそれが彼らに与えるさまざまな圧力や葛藤について鋭い分析を披歴している。

エリアスによると、旧世代が犯した罪から解放され、新しい意味をもつ社会を建設する夢を若者はマルクス主義に託した。マルクス主義の機能は60、70年代でも同じであり、抑圧のない平等な社会を建設するという夢は学生運動でマルクス主義が果たした決定的な役割であった。旧ドイツの罪はすべてファシズムによって代表され、70年代の若者の政治運動は、それに加担し、ドイツのナショナリズムに価値を見出した自分たちの親の世代に反抗することであった。すべての抑圧と束縛は旧世代に由来するものであった。マルクスの教義の中心は資本を独占する資本家とそれから排除される産業労働者との対立であった。しかし、社会的不平等や抑圧の多くの形態はこの図式では適切に説明されるものではなく、特に中産階級の若い世代がマルクス主義を採用したとき、この理論的限界がある種の混乱をきたした。彼らの闘争は労働者がさらされる経済的抑圧に言及することで正

当化されたが、若い世代の生活体験は産業労働者のそれとは異なり、ゆえに彼らは労働者が直面する問題を熟知していなかった。問題は、彼らがプロレタリア独裁を迂回して、社会的不平等の超越を予言する理論的装置を得て、自分たちの方向を設定しようとしたことであった。現場で働く労働者にはテロリストの暴力は珍しくはないが、暴力を行使することのタブーが内面化されている中産階級の若者にとってそれを打破するのは容易ではない。マルクスの理論は抑圧された人々を解放する理論としてはある程度、有効になりうるが、一定の限界を伴って、現実適合的であるにしかすぎない。それは、資本家と労働者のモデルとして、また両者の矛盾を乗り越える救済の理論として、「定着者」と「部外者」の關係に適用されるとき、有効なイデオロギー的武器になるが、同時に方向設定の武器としては空想的にもなる。

抑圧された人々を解放するという理想を現代の若者が全面的にマルクス主義に求めようとするとき、彼らが直面する問題をエリアスは鋭く指摘している。工場労働者としての経験がない彼らが自らの存在を、経済社会で資本家によって疎外されている労働者の立場と同一視すれば、当然矛盾が生じ、その矛盾が彼らを苦しめる。その解決が無理であればあるほど、彼らをそのような状況に追いやっている古い世代や現体制への不信任や憎悪が募り、現実的な解決を阻んでいる敵を暴力によって全面的に破壊したいという衝動に彼らはかられやすい。極端な場合、暴力へのタブーが越えられ、テロリズムによって世界を破壊することが正当化されるのであり、それはマルクス主義の問題解決とは少なくとも違う——後者が暴力革命であれば共通性もありうるが——方向を示唆する。新しい意味を求めていた運動が、こうして意味の自己破壊という結果に終わる。

こうした危険な兆候をエリアスは現代ドイツの極左運動に見出したのである（それは日本の連合赤軍がたどった運命にも似ている）。しかし、それは短期的な原因から生じたものではなく、ドイツの過去の歴史に端を発するさまざまな要素の相互依存關係の所産であった。ワイマール共和国時代の極右グループに属していた若者もドイツ人を抑圧から解放してくれる「ドイツ帝国」に失われた夢とその意味を復活させようとしていたのである。が、彼らもまた最終的には暴力による破壊とテロリズムという負の連鎖、悪循環に陥ったのである。これもまた非形

式化の過程を伴う世代間の、行動様式や道德規範や価値観における対立と関連する。

かくして、ナチズムへの徹底した批判を避け、ドイツのナショナリズムを共有している親の世代に反抗し、支配者集団の古い体質を改革しようとした戦後の若者が改革の手段としてマルクス主義を掲げたことは当時の世界情勢やドイツの状況からしてさらなる恐怖を当局側に与え、民主主義的な改革を目指していた政府に権威的な態度を取らせることになった。若者からすればかつて猛威を振るったファシズムの体質が連邦政府にも残っており、それを明るみに出したいという願望があった。彼らも抑圧や不平等や束縛のない人間社会の建設を夢見ていたが、その可能性をナショナリズムではなくマルクス主義に見出した。こうして、彼らは父親の世代が犯した罪の意識に支配され、古い世代の帝国主義的、国家主義的な権力意識に反抗した。こうした世代間のギャップは植民地をもっていた他の古いヨーロッパの国々でも、あるいは日本でも見られた現象であり、ファシズムとの関係で特にドイツで明確になった。ドイツの若者は妥協せずこの古い世代が犯した罪を追及し、自分たちに着せられた汚名を完全に拭いさりとかった。それではなぜイギリスではなくドイツで反体制運動が暴力を伴って起こったのか。

エリアスによると、その理由は、イギリス人やフランス人の「われわれ像」が戦争時代にはすでに固まっており、彼らの心の奥底に染み込んでいる自尊心も変わらず、特にイギリスではそれが長い国家の形成過程で蓄積されてきたからである。つまり、彼らのこうした人格構造、もしくは国民的エトスは、国家による暴力独占を伴う長い文明化の過程で育まれたものであり、テロなどの暴力でそれを破壊することに価値を見出さなかったからである。逆にドイツ人にはそのような経験が乏しく、とどのつまり、ドイツ連邦の国家や文明はあらゆる手段によって破壊される以外の価値をもたない、とテロリストをして言わしめ、彼らは暴力を手段とするだけで十分であると信じたのである。皮肉なことに暴力を権力資源とするナチズムの亡霊から逃れようとして、自ら暴力に訴えることになったのである。ドイツも高度に産業が発達した国民国家であり、大人の行動にも文明化された要素が窺われるのに、自分が国民の一員であるという自尊心がイギリスほど発展せず、限界を伴ったのである。エリアスはそれに関連して「この点でドイツは

不幸な国である。この国の能力をはるかに超えた2つの運命的なナショナリズムの波、さらに2つの決定的な敗北によって、混乱という遺産が残り、それは多くの点で否定的な国民的感情であった」と述べている。¹⁶かくして、「文明化」と「暴力」という言葉は一般的には相反する意味をもつが、皮肉なことにドイツではそれは最終的には破壊を意味する同じ方向に向かうことになった。

ワイマール共和国時代の国家による暴力独占の遅れが、労働者の極左グループと、旧支配者の貴族的政治を支持する極右グループとの暴力の応酬を防止できず、その結果、テロリズムに訴える「義勇兵团」やその学生下部組織の暗躍と跳梁のみならず、より組織的な暴力統治機構をもつ国家社会主義の支配を許すことで、ドイツ社会の不安をますます増大させたことについてはすでに言及したが、エリアスはさらに暴力の時代を反映し、かつそれを体現する文学作品にも言及する。そうした傾向の作家の一人としてエリアスは、エルンスト・ユンガーを挙げ、それを明確なプロパガンダとイデオロギー的機能をもつ時代の文学ジャンルに属するものと見なしている。

エリアスによると、ユンガーの小説は戦争を肯定的に描くことで反戦文学に対抗し、たとえば、レ・マルクの『西部戦線異状なし』のような反戦文学と対立する構造を成していた。そして、彼のような作家が属する親戦争文学は反戦文学を裏切り行為と見なし、戦争を賛美し、兵士の戦意を高揚させようとした。この2つの文学はワイマール共和国時代の政治的対立集団とそれがもたらす不安な状況を象徴していた。反戦文学を支持する人々は軍備拡張をしなくても、国家機構が整備されれば、ドイツの復興再生はありうると考えていた労働者やリベラルな知識人の世界観を反映し、一方、親戦争文学の支持者は前時代の支配者と彼らに賛同する人々——彼らはドイツの敗戦を二重の失敗、つまりヨーロッパの外交をめぐる覇権争いと国内の政治闘争での敗北と見なした——の世界観を表わしていた。こうしてエリアスは、暴力による政治機構を容認するドイツ国民のファシズムへの傾斜を、つまり非文明化へと向かうドイツ国民の感情の構造を文学作品を通して立証しようとするのである。国家社会主義とその指導者を希求するドイツの道筋は文明化の挫折を示唆する。

その中でも今日の人類の脳裏に深く刻み込まれているのは、言うまでもなく、

ナチスの残虐極まりないユダヤ人大量虐殺への恐怖、いわゆるホロコーストの悪夢がわれわれにもたらす戦慄である。エリアスは第4部「文明化の挫折」においてこの歴史的な悲劇の社会発生と心理発生を冷静に分析する。それは、『わが闘争』の著者の精神異常を個別化することではなく、ドイツの過去の歴史に由来する国民的ハビタスを検証しながらその病理現象全体を理論化することである。残虐非道な行為は、今日のようなテクノロジーの発達した文明社会では起こりえないと思いながらも、20世紀の両世界大戦や冷戦は、人類が依然として非人間的行為の悪循環を断ち切れないという不安や疑念をわれわれに抱かせ続けた。組織的にユダヤ人を絶滅させる計画を立てたナチスの将校アイヒマンの裁判はまさに、人類の現代文明へのそうした失望を象徴するものであるとエリアスは言う。が、ヒトラーの残虐行為が明らかになっても、一般に、ヒトラーのユダヤ人虐殺は例外的な出来事であり、文明社会の癌のようなものでもあり、それは精神的に狂った人間の行動であると解されてきた。つまり、それは彼個人のユダヤ人への非道徳的で、常識を欠いた憎悪から生じたものであり、その一部はドイツ人の伝統的な性格を受け継いでいる、という考えが支配的であった。そうした見方は、一方では、高度に発達した現代の産業社会では一般にホロコーストは起こりえないことであり、ユダヤ人になされた蛮行は突発的な事件であったという短絡的な結論を導き、他方では、同じ条件さえあれば現代の産業社会でもそれが起こりうるという事実をわれわれに気づかせないようにするのである。

ここでわれわれは、ユダヤ人をアウシュヴィッツ強制収容所に送り込み、ガス室で殺すというこの未曾有の計画がすぐに実行されたのではなく、徐々に進行したことを念頭に置く必要がある。エリアスが言うように、原爆が広島や長崎に投下されたのは、日本がアメリカの敵国だったからであるが、ユダヤ人はドイツ人にとって敵国に属する民族ではなかった。実際、ポーランドにあったドイツ領の都市ブレスラウ（エリアスの生れ故郷）では、多くのユダヤ人は自分をドイツ人とはほぼ同一視し、ナチスの残虐行為など予想もしていなかったのである。ドイツではユダヤ人はその当時、高級官僚や大学教授や将校にはなれなかったが、経済活動や文化活動にはほぼ自由に参加できたのである。エリアスも記憶しているように彼の父親はドイツ皇帝を尊敬しており、その時代のドイツ人の精神を体現し

た人間であった。つまり、多くのユダヤ人はドイツに同化し、ドイツ人に危害を加えるようなことは考えてはいなかったのである。¹⁷ところが戦争による危機の時代が到来すると、逆にドイツ人は、ユダヤ人がドイツの経済やドイツ人の精神を破壊し、ドイツを没落に導こうとしているといった被害妄想的、あるいは誇大妄想的な思考の罫にはまったのである。科学や産業の恵みを受けていた人々が、自分たちの苦痛を和らげ、自分たちの自尊心を守ってくれる宗教の教祖や神話の創造者に急に耳を傾け始めたのである。こうした状況ではうわさやゴシップは、科学的な知識よりも力をもつ。エリアスが言うように、ここでは、こうした状況に立たされたドイツ人が自分たちの夢をかなえるために共同幻想にしがみついたのである。つまり、そこにはドイツ固有の長い歴史的過程と人間集団の相互依存関係が、換言すれば、共同幻想を現実化するネットワークがあった。同じ条件があればドイツ国民のみならず、他の国民（たとえば日本人）もこうした悪循環から抜け出せなくなるのである。それではどのような過程を経てドイツはユダヤ人虐殺という非現実的な状況に追い込まれたのかをさらにエリアスの説明に即して見てみよう。

ユダヤ人大量虐殺は1939年にヒトラーとナチ党に属する彼の側近によって最終的に決定された。1930年にナチスが政権を奪取したときも、このような大虐殺が起きようとはヨーロッパでも、アメリカでも予想されていなかった。ナチスのエリートの決定事項は秘密であり、ユダヤ人問題を担当するアドルフ・アイヒマン中佐にこの件は任されていた。ナチスの東西ヨーロッパ侵攻によって多くのユダヤ人が拘束され、その処理に当局は苦慮していた。大量虐殺のモデルはなく、それをめぐって議論が沸騰し、決定にいたるまで時間を要した。ナチスの中心メンバーの間でも意見が分かれ、第3帝国内の権力バランスはきわめて不安定であった。党内の敵同士を戦わせてヒトラーは地位の安定を保っていた。ついにヒトラーが決定したユダヤ人大量虐殺はナチ親衛隊にも支持され、かくしてポグロムが再開されたが、ナチスの東方侵攻で拘禁されるユダヤ人の数が膨大になり、ポグロムは大量虐殺の手段として適切ではなくなった。ゲシュタポはリスクの少ない効果的な方法としてボタンを押すだけで大量のユダヤ人を殺すことができるガス室を考案し、ユダヤ人を収容する強制収容所が必要とされた。最後にだれをユ

ダヤ人と見なすかという困難な問題もあった。1942年にヒムラーの代理によってそれが中心メンバーの会議で決定され、ユダヤ人大量虐殺のガイドラインが策定された。アイヒマン当局の責任も明確にされ、強化され、それは1944年まで続けられた。連合軍の勝利が濃厚になり、ヒムラーは連合軍の今後の柔軟な対応策も期待して、中止命令も出したが、結局約5百万人のユダヤ人が殺された。¹⁸

大量虐殺に関するこうした事実は、他の多くの文献でも示されているし、ナチスの登場を可能にさせ、ドイツ国民をして、その指導者であるヒトラーへの忠誠と崇拜に向かわせた原因の多くが、ドイツ固有の歴史的状況から発生したことも非形式化と非文明化の概念との関連ですでに言及された。その際、ドイツ国民の人格構造が国家形成の過程でフランスやイギリスのそれとはかなり違ったことも社会学的な視点で説明された。その中でも、国家統一が遅れ、第1次世界大戦前後たびたび政治的危機に見舞われたドイツ国民が、その解決策の1つとして決闘の習慣をもつプロシア時代の戦士貴族の気風に染まり、上からの統治を、つまり偉大な指導者の命令や指示に無批判的に服従する支配体制を良しとして、民主主義的政治を低く評価したことも繰り返し強調された。が、問題はなぜドイツ国民がユダヤ人の大量虐殺を許してしまったのか、あるいは少なくともそのような悲劇を黙認したのかということである。もちろん、それはフランスのような国でもかなり起こっていたことであるから、ドイツ人だけがその罪を背負い、罪の意識にさいなまれる必要はない。とはいえ、実際その外傷体験と罪悪感はドイツ国民全体に払拭できないほど深い精神的衝撃を残すことになった。さらにそれが第2次世界大戦後も続き、若い世代とのギャップを生み出しただけでなく、若者の心にも重圧となって受け継がれたということから考えれば、この問題は集団心理的次元の分析を必要とする。つまり、大量虐殺のような非人間的な行為は、仲間や家族が殺された側も、殺人に手を貸し、それを黙認していた側も癒されがたい精神的な傷を負い、それから解放されるまで長い時間がかかるということである。この問題に対するエリアスの心理学的、社会学的分析は鋭い。

指導者に対して絶対的に服従しなければならないという「服従への欲望」は指導者に反抗できなくなると、弱者、劣った者への攻撃となって表面化する。ユダヤ人への敵意はまさにこの種のタイプであった。1933年以前にすでにユダヤ人

は社会的に劣った集団だとドイツ人は見なしていた。ユダヤ人の多くがそれに気づかずに行動していたことが彼らの敵意を煽った。ユダヤ人は、上からの圧力を感じながら生活していたドイツ人の、格好の憎悪の対象になった。つまり、国家主義的信仰体系を通して上流階級と同一感をもっているが、自分たちの劣等感への苛立ちを鎮めてくれる、適当なはけ口を見つけないことができなかったから、ドイツ人はそれを社会的に弱い人々に求めた。収容所の看守も教養がなく、そのほとんどが若い小作人であり、彼らは昔から上からの厳しい命令に服従していた。彼らの劣等感が自分より劣っている人間に向かって爆発した。国家社会主義が出現する前は、ドイツが法治国家であり、裁判官も相当高い自主的判断力をもっているかぎり、国家を支えるために要求される個人の良心も機能を果たしていたが、国家の機能がそうした基準をもたない人々の手に渡ったとき、つまりドイツの官僚が反社会的、犯罪的な行為を奨励したとき、ドイツの大衆は個人の良心の機能を失ったのである。個人の良心の呵責が何であれ、ユダヤ人が収容所で残酷に扱われ、殺されたことを耳にしたとき、それは抑えられ、忘れられたのである。国家の代表者に良心の強化を任せることに慣れていた人々は、国家の規制と個人の良心の葛藤を煩わしいと見なすようになり、その圧力を拭いさろうとした。かくして、ドイツ国民の多くは、強制収容所で何が起こっていたのかと聞かれても、再三再四「わたしは知らなかった」と答えたのである。

エリアスはここで強力な国家規制や国家の政治的圧力が、ドイツ市民個人の良心を越えて行く過程、つまり「外的束縛」があまりに強くなり、個人的領域の「内的束縛」を凌駕する、いわゆる非文明化の過程の心理的条件とその結果を日常的なレベルできわめて明確に分析している。大衆を非文明化の方向に、つまり非人間的な行為に駆り立てる社会的、心理的要因が、短期的に起こることも、あるいは長い歴史過程の蓄積として起こることもありえようが、ともかくここでは「わたしは知らなかった」、「上からの命令に従わざるをえなかった」という反応が、今日でも起こりうる大量虐殺の悲劇の心理的メカニズムを象徴している。それは外部の圧力によって脆くも人間の良心が崩れさる状況を示唆している。かつては人間の良心や理性、知性を求めたドイツ中産階級の努力も国家社会主義の世界制覇の侵略主義的イデオロギーに取って代わられたのである。それではさらにドイツ

の民衆とヒトラーの間にはどのような心理的紐帯が形成されていたのかという問題をエリアスの解釈に沿って考えてみたい。

ヒトラーはドイツ人の多くがもっていた自分自身の良心を完成させ、代表する存在として、またドイツ人自身の「われわれの理想」を象徴的に体現する存在として、人々に受け入れられた。ドイツ人にとってますます必要となる人物は、盲目的に服従するドイツ人の重荷を魔術によって取り除き、自分の肩に背負ってくれる人間、国民の希望や願望を請け負ってくれる人間、ドイツ人がこうむった恥を雪いでくれる人間、新たな偉大さ、新たな権力を国民に保証してくれる人間であった。そのような人物はワイマール共和国にはいなかった。ヒトラーは新しい自尊心やプライドを求めているドイツ人にそれを約束できる能力に自信があった。全知全能の指導者としてそれを国民に約束できる忠誠心をヒトラーはもっており、いかに欺瞞的であれドイツのプライドを取り戻し、ヨーロッパを征服するために自分が必要とされていることを知っていた。現代のように高度に発展した社会でも、自然現象の制御は可能であれ、「社会を制御できる能力の度合い」は低い。人々は今でもこのレベルでは、魔術的な手段で社会事象が制御できると考えており、その場合、指導者の社会事象に対する統御能力は人々の態度に左右される。最も進歩した国でも、特に危機的な状況では、人々は自分に危機が差し迫っていると感じ、ちょうど原始的な部族社会で人々が天災や病気を理解しないのと同じく、その性質が分からないのである。戦争がいかにショックであっても、ドイツ人の戦争への熱意は、高揚し、彼らは最高の魔術師や助言者と心がつながったのである。それゆえ、魔術的儀式や神話的信仰は、彼らを保護し、彼らが無意味や無価値や無力の感覚から救ってくれる薬となった。神話や魔術は感情を満足させる緩和剤となるが、人間を脅かしている社会現象を現実的（理性的）に解決する道を断つ。これがドイツ人をして、ナチスのイデオロギーの罠に陥らせたのであり、その悪循環によって彼らの行動や思考はより幻想性の強いものになった。ドイツの民衆にはナチスを支持する思想が根本的にあったとか、本来彼らはナチスに反対する民主主義の信奉者であったというような知的な議論によって、問題の本質がぼかされがちである。それは基本的に単純な結論であった。つまり、ドイツ人は世界政治の大きな出来事に直面し、絶望的な状況で後光のさす、

ドイツ人のイメージに合った救世主——あらゆる犠牲を払っても戦争を遂行する命令を彼らに下し、彼らの弱さや依存性をこわすことなく、彼らの夢をかなえてくれるシャーマンのような指導者——を求めたのである。

ドイツを文明化の挫折に導きながらも、ドイツ人のイメージに合致した指導者をなぜ多くのドイツ人は選んだのかという問題に絡むエリアスの議論をこれ以上説明する必要はなかろう。興味深いのは、戦時中にドイツ市民が抱いた複雑な心理を彼らの手紙を通じてエリアスが紹介していることである。戦地の息子に宛てた母親のある手紙は、ヒトラーの暗殺未遂に触れて「神が総統をお守りになった」と言いながらヒトラーの安否を気遣い、昨年麦を刈ってくれた息子の思い出を綴っている。ヒトラーの無事を喜んでいる別の手紙は、毎晩空襲があり、友人の家が焼かれ、自宅近くのホテルの駐車場が直撃されたが、食料は十分あるので、ドイツが勝つまで強い気持ちで最後まで自分は頑張ると同じく戦地の息子に伝えている。また別の手紙は、敵機の襲来である家が焼かれてかなりの人が死亡したり、燃料を作る化学工場が全焼したり、あるいは自分の会社が閉鎖されたりして、自分は今困っているが、仕事のことなど取るに足りないと伝えている。それはいづれもドイツ市民が日常生活の不安にさらされながら、いかにドイツの勝利を信じ、自分たちの指導者に深い信頼を寄せていたかを伝えている。¹⁹

政治的危機の際に抱く共同幻想が大きければ大きいほど幻滅によるショックは大きい。確信していた自国の勝利の夢が潰えさり、神として崇めていた教祖の神通力が消失したとき、国民は抱いて立つ価値観をすべて失い、無気力状態になり、その傷の治癒には長い時間を要する。そのような場合、フロイトの心理療法が集団的なレベルで必要とされるのかもしれない。戦後のドイツ政府は、ナチスが犯した罪を償うために犠牲になったユダヤ人や周辺国への経済的な補償に務めたが、エリアスも言うように、その議論が公的に十分になされたとは言えない。そのため、金銭的な賠償がなされ、ナチスの罪が軽減されても、特にドイツの若者は、自分たちもその罪に加担した国民と見なされるかもしれないという不安でアイデンティティの危機に陥り、古いドイツの価値観を依然として保持している自分の親の世代や国家当局に不信感をもつ。それから解放されるために若者の一部はマルクス主義に走る。しかし、それは、当時の東独のイデオロギーの一部であ

り、ドイツの現状にふさわしくないので、当然、旧世代は警察力でもってそれを強硬に抑え込む。国民の理解が得られず、周辺社会からも孤立した左翼学生集団はますます過激になり、テロリズムに訴えようとする。これが70年代にドイツ連邦共和国が直面した深刻な社会問題であり、エリアスはそれを本書の第3部ですでに取り上げ、さらに第4部「連邦共和国に関する意見」でもかなり掘り下げて議論している。

そこでも彼は、極左グループのテロリズムを個別化して、それをドイツ人固有の性格、ナチスの暴力の再発と見なすのではなく、ドイツ人の外傷体験の長い余韻として、つまり、長期的な相互依存の連鎖を通じて理解することで初めて社会学的な意味をもつと警告する。とはいえ、この2つの論文はいずれも1970年代の終わりに書かれたものであり、ベルリンの壁が崩れ、ドイツが再統一される10年前の社会状況を反映し、それに依拠している。したがって、まだ冷戦構造の余韻が残っており、エリアスはその後ソビエトや東欧の社会主義国で起こった大きな社会的変化も、もちろんドイツの再統一も予想していなかったと思われる。が、前にも触れたように、エリアスは本書を通じて、ドイツとドイツ国民が過去に犯した罪を責めたり、彼らの人間的欠陥を暴いたりしているわけではない。どの国も多かれ少なかれ暗い歴史的過去を背負っているが、新しい世代は試行錯誤を繰り返しながらもそれを未来の社会建設という明るい希望に変えることもできるのである。エリアスの社会学理論は宿命論やペシミズムを助長するものではなく、また個人の努力の無意味を強調するものでもなく、むしろその相互依存の連鎖によって、人類が和平化、つまり文明化への道を模索できることを示唆しているのである。実際、その後、再統一されたドイツは、さまざまな難局に直面しているとはいえ、ヨーロッパ連合の中心的なメンバーとしてその歴史的使命を果たしているのである。

(4) 結語：『ドイツ人論』が意味するもの

『ドイツ人論』は、それを構成する論文が1960年代から1980年までの20年にわたって書かれたとはいえ、エリアスの実質的な最後の書であり、『文明化の過程』

の出版から50年を経て完成された記念碑的な出版物である。その間、エリアスは第1次世界大戦後のヨーロッパの混乱期に加えて、第2次世界大戦後の冷戦時代、それに伴うさまざまな政治的事件を見聞してきたし、また人生の約3分の1をイギリスで過ごすという運命も味わった。『文明化の過程』がエリアスのドイツ時代の経験に基づいて書かれたのに対して、『ドイツ人論』にはそれ以後の彼のこうした経験が反映されているという点で重要である。その中でも、『文明化の過程』の冒頭で彼が扱ったドイツにおける「文明化」と「文化」の対立が、少なくともナチズムという結果となって表面化し、その影響がさらに戦後もドイツ人の精神に深く刻み込まれていく過程を、彼が『ドイツ人論』で分析できたことに意味がある。それは、「文明化はまだ続いている」という前者における最後の言葉が、後者において、文明化の逆流現象、つまり非文明化の過程の概念としてある程度裏づけられたことを意味する。それは同時に、彼の、文明化の過程の理論を、直線的に進行するヨーロッパ中心の文明観と見なしてきた社会学者への反論でもあり、『文明化の過程』で発せられた問いに対する彼自身の実質的な答えでもあった。

その最終的な答えに到達する際に、エリアスは自分がユダヤ人であり同時にドイツ人でもあるという問題、すなわちヨーロッパにおける現代の国民国家に共通するある種の文化的、民族的二重性という困難に直面した。ドイツ市民であることを捨象し、ユダヤ人の立場だけからナチズム成立の歴史的過程を分析すれば、固定的な観念やイデオロギーが先行する他律的評価、つまり、現実適合的でない評価が支配的になりやすいし、自分のユダヤ性を無視してドイツの政治や文化について語れば、ドイツにおけるユダヤ人の文化的特殊性が欠落した、一見普遍的に見えるが自律的視点を含まない因果関係中心の評価になりがちである。分析対象に積極的に係りながら、いかにそれから距離を置き、現実適合的な知識に到達できるかという、社会学の重要な問題をエリアスは、「参加」と「距離化」という概念で具体化した。『ドイツ人論』においてエリアスがそのような知識に到達することに成功したかどうかを判定するには、さらに議論の余地があるが、少なくとも彼がそうした方向を目指したことは事実である。その点でも『ドイツ人論』は重要である。

周知のごとく、ナチズムの歴史についてはこれまで枚挙にいとまがないほど数多くの本が書かれてきたし、これからも書かれるであろう。その多くが豊富な資料に基づき、また学問的な方法を駆使してナチズムの政治的構造や心理学的要因を客観的に分析してきたことは事実である。その中でも、「非政治的人間」を代表するトマス・マンが、ナチズムによって破壊された祖国ドイツの文化的復興を願って亡命先のアメリカで「ドイツとドイツ人」に関する演説を、ラジオ放送を通じて行ったことは有名である。偉大な詩人や哲学者が輩出したドイツは、不幸なことに異常な政治的イデオロギーの犠牲になっているが、それは本来のドイツの姿ではなく、ドイツ人は世界の平和を愛し、ゲーテに見られるようなコスモポリタニズムを理想としてきたことをマンは強調し、加えて、若い国ドイツはロマン主義的な若者にありがちな過ちを犯したが、その罪と破滅の中から人類の進歩に貢献する真のドイツ精神が甦って欲しいと訴えている。²⁰

さらに、社会科学の方面からもナチズムへの鋭い批判や分析がなされ、エーリッヒ・フロムの『自由からの逃走』はこの分野では古典的名著となり、現代産業社会で疎外された人間が自由の意義を放棄していかにヒトラーのような権威的、家父長的人間像を崇め、それに拝跪するようになるのかを心理学的に分析している。²¹フロムのみならず、アドルノ、ベンヤミン、マルクーゼ、ハーバーマスへと連なるフランクフルト学派の業績はファシズムの分析とその克服の手掛かりを示唆するという点では今もなお大きな影響力をもっている。また『全体主義の起源』で有名な女性政治学者ハンナ・アーレントは膨大な資料に基づいて、現代社会を蝕むファシズムの起源やその歴史をヨーロッパ的な規模で追求し、その非人間的な政治学や哲学を助長する体制を鋭く批判している。また、同時に『暴力論』では、彼女は現代アメリカの官僚主義のみならずソビエトの官僚主義的な社会主義にも潜む、管理主義体制による人間の暴力の根源を追求する。²²

またそれより少し遅れば、エルンスト・カッシーラーの『国家の神話』でもこれに関連する問題が議論されている。そこではプラトンからヘーゲルにいたるまでの国家観に宗教的・神話的発想が見られ、それが共同幻想的な信仰体系を生み出すナチズムへと発展し、神話性、宗教性の克服が現代政治の課題であることが指摘されている。²³また、21世紀になって刊行された『オクシデンタリズム』の

著者は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』を意識しながら、西洋の産業・物質文明とそれに由来する資本主義的文化を悪の根源として否定し、敵視する東洋のいわゆる「反西洋主義」の系譜を辿り、それをイスラム原理主義のテロリズムとの関係で論じている。²⁴

問題はファシズム、ナチズム、全体主義などの言葉によってこれらの著者が提示している非合理的で暴力的な政治形態に絡む問題意識を、エリアスが『ドイツ人論』でどれだけ共有しているかである。もちろん、エリアスは彼らが指摘する国家社会主義の政治に潜む暴力性を否定的に捉えていることは事実である。しかし、繰り返し言及したように、彼がナチズムをドイツ固有の異常な政治現象ではなく、条件さえ整えば現代の他の国民国家でも起こりうると見なしていることに注目しなければならない。たとえば、権力者が体制内部の反対勢力をお互いに戦わせながら、自らの権力を維持し続けるという構造が、ナチズムだけでなく宮廷社会にも見られることをエリアスが指摘しているように、彼の主要な関心は、そこに共通する社会学的な問題にあり、『ドイツ人論』が社会学の重要な文献として扱われる所以は、その視点が本書でも維持されているからであろう。²⁵

また、『ドイツ人論』でエリアスが分析の対象としたファシズムの構造、それを支えるドイツ人のハビタス、彼らの理想を体現するヒトラーの人間像との相互関係が、日本の軍国主義の構造、それに合致する日本人のハビタス、神格化された天皇の人間像との相互関係にいくつかの点で類似していると言えるかもしれない。あるいは、その間、日本がたどった文明化の過程を同じく「文明化の挫折」という表現でたとえることができるかもしれない。周知のごとく、ドイツと同じく日本も近代国家の成立過程でさまざまな困難に直面した。ヨーロッパの文明とその国家制度をモデルとしながら、日本の後進性をどう克服するかが明治維新以降、支配的エリート層にとって大きな課題であった。その間さまざまな民主主義的改革もあったが、最終的には、天皇を頂点とする上意下達的な支配体制を維持することで、国家の産業化や軍事化が図られてきたし、そのような図式が日本人のハビタスを形成し、独立国家を維持するための手段として軍事的成功が第一義的と見なされた。天皇制イデオロギーは日本人の戦士（武士）の気風とあいまって軍国主義の温床となり、それは戦局の悪化とともに神話的発想と集団幻想に支

えられた世界制覇の夢を助長し、最後は「人間魚雷」や「神風特攻隊」といった非合理主義的なある種の自爆テロを正当化した。戦争末期になっても天皇崇拜は——ドイツにおけるヒトラーへの盲目的な服従のように——続いた。

戦後、日本はアメリカの民主主義的な憲法によって戦争を永久に放棄し、「一億総懺悔」という言葉にも象徴されるように、その軍国主義や植民地・侵略主義を大いに反省することになった。60年代から70年代にかけて日本はドイツと同じく好景気に支えられ、この高度成長期に日本人は「もはや戦後ではない」という表現によって戦争体験を忘れようとしていた。ところが、日本の若い世代はドイツの若者と同じく親の世代が犯した罪の呪縛から逃れることができず、その多くが左翼的反体制運動に共感し、その主張が支持されなくなると、少数の過激派が連合赤軍の名の下にテロリズムを容認し、世界を震撼させた。

こうして日本が戦前から戦後にかけてたどった歴史の道筋を見ると、それがドイツの歴史的過程にかなり類似していることが分かる。したがって、ある意味では『ドイツ人論』を「日本人論」として読みかえることも可能であろう²⁶。実際、これまでもおびたしい「日本人論」が書かれてきた。あるものは日本経済の飛躍的な発展を賛美し、別のものはテクノロジーや産業は発達していても、日本の政治の仕組や集団中心の社会習慣は外国人には謎であると批判する。ある意味ではどれも正しいかもしれないし、正しくないかもしれない。エリアスの方法論が絶対に正しいわけではないが、少なくとも彼が『ドイツ人論』で駆使した長期的な社会学的分析がこれらの「日本人論」にはあまり見られないことは事実である。そういうわけで、その多くは、現段階では厳密な意味での社会学的視野に欠け、しかも、個人の恣意的な価値判断に左右されがちになり、状況や時代が変われば、社会学的に応用可能な知識として役立たなくなる可能性が高い。そういう意味でも、『ドイツ人論』でエリアスが駆使した分析方法は新たな「日本人論」の可能性を示唆してくれる有益な模範であると言える。

注

¹ 『ドイツ人論』については以下の文献を参照。Robert van Krieken, *Norbert Elias* (London: Routledge, 1998), pp. 107-134; Stephen Mennell, *Norbert Elias: An Introduction* (University College Dublin Press, 1998), pp. 273-75; Dennis Smith, *Norbert Elias and Modern Social Theory*

(London: Routledge, 2001), pp. 54-6.

² 本稿では主に次のテキストを使用した。Norbert Elias, *The Germans* (Columbia University Press, 1996); Norbert Elias, *Studien über die Deutschen* (Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1989)

³ Anne Frank Stichting, *Die Welt der Anne Frank* (Amsterdam, 1985), p. 184.

⁴ 「われわれ集団」の概念については以下の文献を参照。Norbert Elias, *The Society of Individuals* (New York: Continuum, 2001), pp. 153-233; J. Goudsblom and S. Mennell, *The Norbert Elias Reader* (Oxford: Blackwell, 1998), pp. 92-95, pp. 230-34.

⁵ この概念については次の文献を参照。 *What is Sociology?* (Columbia University Press, 1970) p. 156.

⁶ 「参加」と「距離化」の概念については以下の文献を参照。J. Goudsblom and S. Mennell eds., *The Norbert Elias Reader*, pp. 84-91; *Norbert Elias: On Civilization, Power and Knowledge* (Chicago University Press, 1998), pp. 217-48.

⁷ J. Goudsblom, E. Jones, S. Mennell, *The Course of Human History* (New York: N. E. Sharpe, 1996), p. 109.

⁸ Thomas Salumets, ed., *Norbert Elias and Human Interdependencies* (Montreal: McGill-Queens University Press, 2001), p. 38.

⁹ 「外的束縛」と「内的束縛」の概念については次の文献を参照。 *The Norbert Elias Reader*, pp. 236-37.

¹⁰ *The Norbert Elias Reader*, pp. 235-39.

¹¹ 「非形式化」の概念については次の文献を参照。 *The Norbert Elias Reader*, pp. 235-45; Robert van Krieken, *Norbert Elias*, p. 114. なお、「非形式化」について詳しく論じた文献として次のものが挙げられる。Cas Wouters, *Informalization: Manners and Emotions since 1890* (London: Sage, 2007).

¹² J. Goudsblom and S. Stephen, *The Norbert Elias Reader*, pp. 235-36.

¹³ V. I. Lenin, *The State and Revolution* (Tokyo: Kyokuto Shoten, 1968), pp. 47-9; pp. 70-80, pp. 109-124.

¹⁴ Norbert Elias, *The Court Society* (Oxford: Blackwell, 1983), Chap. VII 参照。

¹⁵ 「義勇兵団」の名称や規模やリーダーの名前は次の文献に詳しい。Nigel Jones, *A Brief History of the Birth of the Nazis* (London: Robinson, 2004), pp. 282-296.

¹⁶ Norbert Elias, *The Germans*, p. 281.

¹⁷ Norbert Elias, *Reflections on a Life* (Cambridge: Polity Press, 1994), p. 5-6, p. 11, p. 127 を参照。

¹⁸ Norbert Elias, *The Germans*, pp. 304-308.

¹⁹ これらの手紙については *The Germans*, 391-98 を参照。

²⁰ トマス・マンの演説については以下の文献を参照。Thomas Mann, 'Deutschland und die Deutschen' 1938-1945 in *Thomas Mann - Essay*, Band 5 (Frankfurt am Main: S. Fischer, 1996), pp. 260-281.

²¹ Erich Fromm, *Escape from Freedom* (New York: Avon Books, 1969), pp. 163-201 を参照。

²² Hannah Arendt, *On Violence* (New York: Hartcourt, 1969), pp. 79-87 を参照。 *The Origins of Totalitarianism* (New York: Hartcourt, 1968), pp. 341-459 も参照。

²³ Ernst Cassirer, *The Myth of the State* (Yale University Press, 1946), pp. 277-296 を参照。また文明化と非文明化（ホロコースト）の関係では次の文献を参照。Zygmunt Bauman, *Modernity*

and the Holocaust (Columbia University press, 1989), pp. 12-18, pp. 27-30.

²⁴ I. Buruma and M. Margalit, *Occidentalism: A Short History of Anti-Westernism* (London: Atlantic Books, 2005), pp. 13-47を参照。

²⁵ Norbert Elias, *The Court Society*, pp. 276-83を参照。

²⁶ 「日本人論」に言及し、日本における日系ブラジル人と地元民の対立を、エリアスの「定着者」と「部外者」の関係から捉えた文献として Julian Manning, "The Established and the Outsiders in a Japanese Town in A. Ohira ed., *Norbert Elias and Globalization* (Tokyo: DTP Publishing, 2009), pp. 91-128を参照。

